

斐太北小 ESDだより

Education for Sustainable Development(持続可能な社会の創り手を育む教育)

一歩上の自分へ — 伴走する教育と、成長のかたち —

本校では、(PTA 総会でも触れましたが) グランドデザインにおいて、教師の役割を「管理・指導」から「伴走」へと位置づけています。

では、「伴走する」とは、具体的にどのような言動を指すのでしょうか。



◆ 子どもたちの成長に欠かせないもの

学校生活の中では、思い通りにいかないことや、人とぶつかる場面が必ずあります。それは、決して特別なことではなく、子どもたちが成長していく上で、自然に起こる大切な経験です。

すべてを取り除こうとするのではなく、その経験をどう受け止め、どう次につなげていくかが、何より重要であると考えています。

◆ 「伴走する」とはどんな関わりか

4月20日(月)本校の職員研修では、次のような関わりを大切にすることを確認しました。

- ・すぐに答えを与えるのではなく、子どもの考えを引き出すこと
- ・うまくいかなかった出来事を、次につながる学びとして捉えること
- ・安心して挑戦できる環境を整えること
- ・関係がうまくいかなかったときに、やり直す機会を大切にすること

教師が前に立って導くのではなく、子どものそばで一緒に考え、支えながら歩いていく。
それが、本校の考える「伴走」です。

これから、日々の斐太北小の子どもたちの姿をとらえながら、より具体的に関わり方について考えていきます。

◆ 今の経験が、これからの力になる

うまくいかない経験や、思い通りにならない出来事は、そのときにはつらく感じることもあります。

しかし、そうした経験の一つ一つが、人と関わる力や、自分で考えて行動する力となり、やがて子どもたち自身を支える土台になっていきます。

本校では、「今のつまずきが、これからの力になる」という視点を大切にしています。



◆ 子どもたちの変化から

高学年部での学びを始めた当初、ある6年生の子どもたちは、「自分たちだけの場所(教室)がないと困る」と、戸惑いや不安を口にしていました。

それは、とても自然な気持ちだったと思います。

しかし、話し合いを重ね、学年部によるみらい学習の中で協働する経験を積み、給食も一緒にとるようになる中で、少しずつ関係が変わっていきました。

4月24日(金)給食配膳時に、こんな言葉が聞こえてきました。

「わあ、もう5・6年っていう牛乳の入れ物をつくってくれたんだ!」

これまで「5年」「6年」とそれぞれあった牛乳の入れ物が、5・6年で一つの入れ物になった様子を見つけ、発せられた一言です。この一言には、春に想定していた「自分たち」ではなく、「5年生・6年生」という広がった「私たち」の姿がありました。そして、その変化を、子ども自身がうれしいこととして受け止めている様子が見られました。

はじめは不安だったことが、関わりの中で安心やつながりへと変わっていく。その過程こそが、子どもたちの成長そのものだと感じています。



4月はグループごとに学校探検
2年生が1年生に学校紹介中

◆ 最後に

こうした変化の背景には、子どもたちの思いに寄り添い、すぐに答えを急がず、関わり続けてきた教職員の支えがあります。高学年部の教職員のこの一か月の積み重ねに、心から感謝しています。

これからも本校は、子どもたち一人一人が経験の中で学びながら、**一步上の自分へと進んでいく教育**を大切にしていきたいと思います。

ご家庭や地域の皆様にも、子どもたちの成長の過程を温かく見守っていただければ幸いです。



4月24日(金) 中学年が、理科室で図工を実施 学年混合で、3~4人ずつグループになって混色の学習
二つの色を水加減に気を付けながら混ぜて色づくり 画用紙につくった色をそれぞれの筆づかいで表現しました